被災地における創作活動を通した教育コミュニケーション形成、実践研究

◎花澤　洋太　（東京学芸大学美術・書道講座 美術分野）
〇石井　壽郎　（東京学芸大学美術・書道講座 美術分野）
桐山　卓也　（東京学芸大学付属竹早小学校）
山田　　猛　（東京学芸大学付属竹早中学校）
片桐　隆嗣　（東北芸術工科大学）
柳川　郁生　（東北芸術工科大学）
藤原　久美子（NPO 法人東北の造形作家を支援する会 SOAT 理事）
代表者連絡先：yota111@u-gakugei.ac.jp

【キーワード】　美術、創作活動、コミュニケーション、ワークショップ

１　本プロジェクトの目的

近年、情報化の極まりによる教育域への様々な影響の中において、教育域における実感を伴った学習のへの期待が増大している。図画工作は教育教科内において、実材を用いて表現を通すことにより自己を提示する過程で、様々な実感を伴った情報を得る事の出来る領域である。学習対象者にとって自己の学習成果として成果物を制作する途上にて実感を伴った情報を得る事は多大に期待出来る。しかし教育現場に置いては時間的な制約もあり多くの実感獲得カリキュラムは成果物重視の傾向である。

本プロジェクトは本学美術科、付属校小中教員、東北芸術工科大学教員、NP 法人 SOAT スタッフ、学生との連携、交流を行い震災被災地（仙台市内及び石巻市内）児童館、NPO 法人 SOAT の協力においてこども達と創作プロジェクト活動を通して多様なシーンからの成果物重視ではない実感獲得、活動、環境を通して新たな教育コミュニケーション形成を行った。

専門性を生かした継続的で直接的な人的教育、被災地支援は重要であり教員、学生は創作活動を通した教育活動を実践することで現在のメディア報道では知り得ない復興状況を認識する。また被災地における SOAT、東北芸術工科大学教員との連携で行う創作プロジェクト活動企画、実践経験は本学教員、教員を目指す学生にとって多様な思考獲得し、非常に有意義であり現代における教育意義、教育効果等を検証する。

２　本プロジェクトの実施内容

平成 27 年度、28 年度に 2 年間のプロジェクト経過をたどると 1 年目は平成 27 年 9 月に 3 日間の関東における東日本大震災を忘れないワークショップ活動を本学教員 2 名、美術科学生 15 名で行い、12 月に石巻相川保育所における直接的教育支援ワークショップを本学教員 2 名、本学美術科学生 8 名で行い被災地 NPO の視察を行った。2 年目は 7 月に仙台市 NPO 法人 SOAT 野外施設において直接的教育支援ワークショップを本学教員 4 名、本学美術科学生 6 名で行い、10 月に仙台市 NPO 法人 SOAT 野外施設において直接的教育支援ワークショップを本学教員 3 名、本学美術科学生 5 名で行った。本プロジェクト内容の成果は震災直後から行っている被災地支援活動も含め平成 28 年 9 月から平成 29 年 12 月にかけてまとめ「被災地における創作活動を通した教育コミュニケーション形成、実践研究」論文として大学美術教育学会「美術教育学研究」第 49 号（pp.305～312）平成 29 年 3 月刊において発表を行う。

プロジェクト実践概要

主な活動は付属校現職教員、連携大学と被災地において直接的教育支援、関東において東日本大震災を風化させない活動を行った。

平成 27 年度活動

(1) 関東における東日本大震災を忘れない活動

震災の記憶を語り継ぐアートイベント及びワークショップ「～忘れないために～」

「つなぐアート！・ステンドグラスモザイクワークショップ」

開催日：平成27年9月19日（土）、20日（日）10:00～17:00 / 場所：ららぽーと横浜1F・サウスコート

参加者：約500人

概要：参加者が描いた半透明の紙をラミネート加工し繋いで、店内のガラス通路に大きなステンドグラスのように飾るディスプレイワークショップ。

「ららぽーと横浜・クラフトミュージアム」

開催日：平成27年9月21日（月・祝）、22日（火・祝）10:00～17:00 / 場所：ららぽーと横浜1F・サウスコート

参加者：約1,500人

概要：世界の有名な彫刻像をダンボールで制作、参加者は折り紙で折った花をダンボール像に貼り付け制作、展示。

(2) 石巻市北上子育て支援センター・相川保育所における直接的教育支援

「子ども育成支援プロジェクト」

開催日：平成 27 年 12 月 4 日（金）9:30～11:00 / 場所：石巻市相川保育所：宮城県石巻市北上町十三浜崎山 181

・ワークショップ「ツリーの森 ～つくってあそぼうしんぶんし～」

場所：相川保育所　室内ホール

参加者：相川保育所参加児童 23 名

概要：大量の新聞紙を使用して学生リーダー「みんなでクリスマスツリーになろう！」という導入からスタート、学生たちは子どもたちの行動に合わせた創作活動。学生企画によるワークショップ内容は活動における成果物が目的ではなく日常的にある素材を新たな視点で考え創意工夫する過程、コミュニケーションに重点を置く。石巻市北上町は震災により人口は減少し、子ども達にとっての日常的なコミュニティーは限られている中で創作活動を通した学生達との交流は重要であり望まれている。子ども達にとって学生達との活動は新鮮であり多くの眼差しのもとでの活動は日常の保育活動では体験できた。学生は子ども達の興味の推移を感じながら共に活動を行うことの重要性を理解した。

・保護者対象ワークショップ

開催日：平成 27 年 12 月 4 日（金）10:00～11:30 /場所：石巻市北上子育て支援センター　室内ホール

参加者：保育所通園保護者 11 名

・「柳生和紙のランプシェード作り」

仙台の伝統手漉き和紙・柳生和紙を使用したランプシェード作り。

・「ハーブソープ作り」

概要：天然素材（蜜蝋、薔薇エキス）を練り混ぜ様々な形態のオリジナルソープを作り。

(3)石巻NPO法人にじいろクレヨン視察
開催日：平成27年12月4日（金）15:00～16:30　/ 場所：石巻市門脇字浦屋敷83-24
概要：石巻市内にあるNPO法人視察、NPOスタッフの講義参加。

平成28年度活動
(1) ワークショップ「出張図画工作の時間1 ～くっつけて空間～」
開催日：平成28年7月16日（土）10:00～16:30 / 場所：NPO法人SOAT：宮城県仙台市青葉区笹郷笹ノ上5-4
参加者：仙台市榴岡児童館 親子参加25名＋新田児童館親子参加25名　合計50名
概要：NPO法人SOATの野外スペースは自然豊かな1000坪であり野外環境には様々な素材がある。活動に際してあえて明確な指導計画は立てず最低限の接着素材のみを用意。参加者は本学学生の案内、語りかけのもと環境、素材を観察した。参加者は新たに獲得した視点、思考で共に環境全体を使ったオブジェ制作を行った。
(2) ワークショップ「出張図画工作の時間2 ～SOATの庭で遊び発見～」
開催日：平成28年10月28日10:00～16:30 / 場所：NPO法人SOAT場所：宮城県仙台市青葉区笹郷笹ノ上5-4
参加者：石巻市相川保育所　親子参加50名　合計50名
概要：普段、仮設住宅などで不自由な生活をしている石巻北上町相川保育園幼児、保護者を大型バスで仙台NPO法人SOAT施設まで招き自然環境の中で本学教員、学生と共に活動を行うことで環境から誘発される創作、遊びの発見を行った。

a 関東における東日本大震災を忘れない活動を通して
東京学芸大学の多くの学生は震災当時、小学性～中学生でありメディア情報、ライフラインの切断などが震災記憶であり、直接被災した方々との接点を持つことは殆ど無い。教員を目指す学生にとって直接の人的交流は震災を理解する上で必須でありメディア報道を客観視する機会となった。

b 被災地における直接的教育支援活動を通して
日常と異なる地域,環境の中で活動は自らの研究分野を深めた。また実際には未だに仮設住宅に住むことを余儀なくされている人もいます。自分の足で被災地に行き,現状を知り、また災害が起こった時にどうしたらいいのかを考えるきっかけにするとともに、今後も関東から少しでも被災地の復興の手助けができるように働きかけていく必要性を実感した。

３　成果と課題

本プロジェクトを推進するにあたって東京学芸大付属校の先生の協力があることでワークショップ参加者、本学学生はより幅広い実践体験を獲得できたと考える。東日本大震災から6年が経過した現在,東北被災地のハード面に関しての復興作業は少しずつであるが進行している。しかし反面,人的,教育的支援は減少傾向である。現在も未だ仮設住宅での生活を余儀なくしている子ども達は多く、東北各地、仙台市に移住して馴れない環境の中での暮らしを強いられている。多くの東北エリアの大学,NPOは活動実施者の多くが被災者であり被災者,被災地の状況をより把握した支援活動が長期的に行われているが疲弊の傾向にあ

り新たな連携、関係性の構築を望んでいる。

関東圏の大学は震災記憶を風化させないための活動を関東で行い震災,災害に対しての備えを喚起し、継続して被災地において専門を生かした直接的教育支援が望まれる。支援活動に参加した学生達はワークショップ活動を通して被災地,被災者と向き合うことは他者理解を深め自身を客体化する重要な機会と考える。また各自の専門,教育,美術の意味を深化させるものと考える。

活動実施後、参加施設、NPO スタッフ、保護者のインタビューからは参加者と年齢の近い多くの学生が参加する事で子ども達は日常では体験できない異年齢交流、重層的,複合的なコミュニケーションを経験の機会であり横断的な場を創る継続的な活動が重要と強く要望された。また参加した多くの本学生アンケート結果からは活動を通して美術教育,被災地支援のあり方を考える機会となった。また被災地に赴き活動を行いたいと考えていても移動費など諸経負担が多く行動出来なかったと回答があり 2 年間の特別開発研究プロジェクト採択は感謝している。復興への道のりは長く、今後も関東からの支援は必要であり東京学芸大学の教員、学生が連携した継続的に活動を展開し少しでも被災地の人々、社会をつなぎ、新たなコミュニケーション環境をつくり、教育的意義を明確にしていきたい。